

とはち通信

※長崎西南部の史蹟・名勝・天然記念物等の紹介通信

第 3 号

※一説によると、かつて長崎西南部一帯を総称して戸ハヶ浦（とはちがうら）と呼ばれた時期がありました。現在、この名は存在しません。長崎西南部に對する尊敬の念をこめてこのようなタイトルをつけてみました。

二〇〇八年九月一日 落矢八郎

長崎の台場（概略その一）

みなさん、台場と言う名称を聞いたことがありますか？多くの方はこの名称を聞いたことがあるかと思えます。東京のお台場がよい例ですね。しかし、「台場とは何なのか」と考えると頭を抱え込む方がいるかも知れません。では、台場とは何でしょう。簡単に言えば、台場は江戸時代の砲台です。異国（外国）船の不法侵入を防ぐための砲台で、東京に存在する「お台場」の名称はその名残りなのです。実は…この台場はかつて長崎にも存在しました。みなさんもご存知でしょうか、江戸時代の長崎は外国に開かれた唯一の貿易港でした。徳川幕府はオランダ・中国（清）と貿易をしました

が、その中で海外文化を取り入れた事と思われる。この二国以外の異国船の侵入を防ぐために台場は建設され、現在、古い順に在来御台場（古台場・新規御台場（新台場）・増台場・佐賀台場にわけることが出来ます。今回はこれにしたがって説明していきます。その前に台場とは具体的にどういったものなのかを説明しなければなりません。まずはそこから。台場は当時、石火矢臺（臺は台の旧字）と呼ばれていました。石火矢臺に関する記事は『長崎市史』に端的な記述があります。すので、ここで引用してみます。

「石火矢臺は今の台場で當時は石火矢台と稱へ長崎では御台場と唱へて居た。當時は海岸の要所に長拾七間巾五間高八九尺の石壘を築きて何等の遮蔽物を用いない。有事の日に當りては火矢藏より筒を此處に運び、その筒先に當れる處のみを開放して幔幕を張り繞らし鎗旗等を建て、軍容を示し夜は提灯を點した。是を現今の遮蔽物に據りて一切其の處在を不明ならしむるとは全く相違して居る。」

この文章には石火矢臺の規模とその役割が書かれています。前者は長さ：十七間（約三十m）・幅：五間（約十m）・高さ：八九尺（約二・五m）の規模で、海岸の要所に石垣を築いていたと言っています。また、石火矢臺の周りは何の障害物もなく視界が良好であった事もわかります。後者は有事の際に大砲を

倉庫から砲台に移動して砲撃を行い、槍つきの旗を立ててその存在を示し、夜は提灯をともしたと書かれています。このように石火矢臺は海岸の要所に建設された軍事的色彩が強い施設であることがわかります。話が長くなりましたので、では早速、時期別の台場の説明に入ります。

●ホームページ
とはち通信はとちち通信で検索
●メール
h_ochiya@yahoo.co.jp

●在来御台場（古台場）
一六五三（承応二）年に建設された台場を指します。平戸藩の藩主である松浦鎮信は幕府の命によつて長崎湾に七箇所の台場を建設しました。その台場群は天領・佐賀藩領・大村藩領に設置されました。ちなみに在来御台場・古台場と言う名称はこの時存在しません。後になつてつけられた総称です。

●大多越台場（一番石火矢臺）
現在の長崎市西泊の大田尾の海岸に存在した台場です。この地は天領（幕府の直轄地）でした。長崎湾と言うより、むしろ長崎港に存在する台場であつたとすべきでしょう。明治になって三菱の貯炭場になつてしまつたため、台場は消滅しました。現在は造

の場所ですが、可能性の一つとして現在の女神バス停（下り線）付近が絵図から推定されます。ただし、断定はできません。

●神崎台場（二番石火矢臺）
現在の長崎市木鉢町内に存在した台場です。この地も天領で、天文峰の裾野の海岸に設置されました。北には大多越台場が位置し、付近には神崎神社があります。明治以降、油槽所が建設されたため、かつての姿は消滅しました。もちろん、会社の敷地なので立ち入り禁止は言うまでもありません。（文責 落矢八郎）

続きは次号ということで…



大多越台場

① 大多越台場遠景 (女神側から撮影)

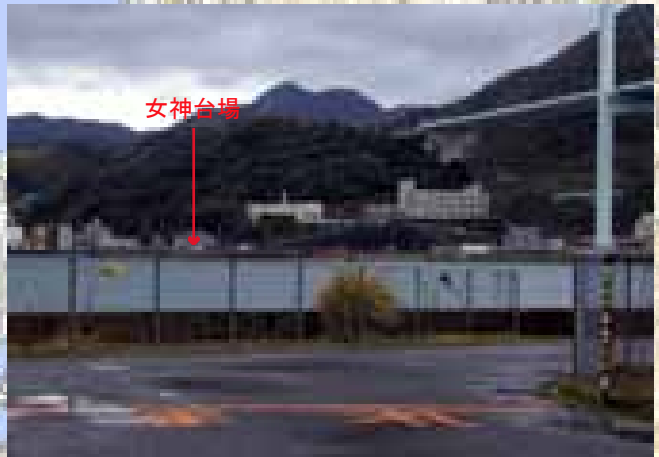
今は造船関係の工場が立ち並び、台場の痕跡を見ることはできません。天門峰の北裾野に位置し、やや奥まった場所に台場は築かれたと思われます。このため、外から目立つ場所ではなく、格好の台場であった事がうかがえます。



神崎台場

③ 神崎台場近景 (神崎海岸の磯から撮影)

現在、油槽所となっています。このため現地に立ち入ることは不可能です。かつて在来御台場のあった場所は写真のおり埋め立てられています。また、この一帯は神功皇后の鎮懐石伝説の場所でもあります。



女神台場

② 女神台場遠景 (大多越側から撮影)

現在は国道499号線が敷設されており、当時の姿をみることはできません。この付近は道路等によって昔の地形が大きく変わりました。しかし、女神崎だけは現在も残っており、干潮時にはいつでも見学する事ができます。